

助成年度：平成8年度

[所属] 大阪府立大学 総合科学部
[役職] 教授
[氏名] 金子 務 (他計9名)

[課題]

照葉樹林における伝統的農村のもつ環境保全機能

－中尾佐助資料を活用して－

[内容]

宮崎県西米良村と長崎県対馬の農山村を対象として照葉樹林文化の基層にかんする要素について研究分野を異にする分担者が現地調査と共同研究会を行い、それぞれの要素について、環境保全や環境倫理とのかかわりを考察した。

焼畑に付随した自然と景観に関する研究では焼畑における火入れ後の自然環境の動態を植生構造と昆虫相の評価によって検討し、焼畑によって形成される林分構造の景観をフラクタル分析によって解析した。焼畑では火入れ直後でも、群落構成種は木本が多く、攪乱依存性植物の比率は周辺の攪乱地より低かった。遷移の進行に伴って攪乱依存性植物は減少する傾向にあった。チョウの飛来も認められたが、焼き畑に付随した植物に依存する種は確認できなかった。焼き畑耕作によって作られる林分パッチの構造には一定の傾向が認められた。

伝統的な農業に関する研究では、景観の一要素である水田のあぜ道の多様性、ニホンミツバチの伝統的飼養の実態、在来品種の多様性の維持方法、照葉樹林文化の主要素である栽培アズキの成立など多角的な側面について検討した。両地域の畦畔は豊富な形態を示し、あぜ道の植生は多様であった。対馬には固有のあぜの管理がみられ、植生も多様であった。ニホンミツバチの伝統的飼養は調査対象地のすべてに見られたが、巣箱の形態に大きな差がみられ、近接の農作物への殺虫剤の使用によってハチが絶滅していたのに対し、人間の扶助のある地域では巣箱が祠として祀られる例が認められた。また、鹿の過剰な繁殖によって在来品種の維持が中止される例もあり、様々な要因によって農業自身や技術が変更を余儀なくされる例が認められた。

人文や倫理に関わる研究では、山の神信仰、猪の文化、茅に関わる習俗と倫理要素などについて検討した。対馬ではさまざまな形で山の神信仰が残っており、樹木や自然を大切にする意識と関わっていることが指摘された。照葉樹林の極相林が残ってる、竜良山は大きなご神体であり、その具体例と考えられた。狩猟にまつわる習俗も多く、猪を絶滅させた対馬では亥の子祭りが、かつて多様な形で分布していた。わらぶき屋根に使われる茅の実態を観察し、粽や魔除けとの関わりが指摘された。

照葉樹林文化のさまざまな要素について自然と人間との関わりがあり、それらが倫理的にもつながっていることが判明したが、これらの位置づけにはさらに詳細な研究が必要と考えられた。